

■『稲穂』第6号の発刊に当って

「伊那谷の三四郎」、 六十年の月日

岡村隆臣

(高2回、在京飯田高校同窓会長)



私が旧制飯田中学校に進学したのは昭和十九年の春である。今から考えれば、太平洋戦争の末期であったが、国民学校の教育ですっかり「軍国少年」になり、「軍人志望」であった。

入学しても上級生は名古屋や諏訪の軍需工場に動員されており、残った私たちは学校農場や農繁期勤労の動員などで勉強どころではなかった。

翌年の昭和二十年四月から学校そのものが豊川海軍工廠の工場になった。一日三交代制で特攻兵器の羅針儀の製造に従事した。中学二年、満十四歳そこそこの少年が、午後十時から翌朝の午前七時まで、徹夜で旋盤などにつくのである。

そして、八月十五日。強い夏の陽ざしが伊那谷に注いでいた。この日は午後からの出校であったので、時又駅から十二時過ぎの電車に乗ったため「玉音放送」は聞けなかった。しかし、自宅が駅の近くの友人は「どうも、戦争は終わったようだ」とそっと話してくれた。不安のなか、登校した生徒たちを集め、工場主任の鶴川大尉は「日本は戦争に負けた。だが、我々はあくまで戦う……」と演説したが、その日限りで私たちの前に姿を見せなかった。

学校は九月初め頃から開始されたが、忘れられないのは教科書を墨で塗って使用したことである。昨日まで「鬼畜米英」と叫んでいた大人たちはコロリと変わり、「民主主義」を唱え始めた。しかし、私たちが接した先生たちの苦悩も深く、また生徒に親身に接してくれた尊敬すべき先生方も多かった。

私たちが高松台に通学した旧制中学から新制高校への六年間の前半は、戦争の末期と後始末、そして食糧危機、飯田の大火など、大変な時期であった。その後半は、アメリカの占領下という特殊な事情はあったが、戦中の抑圧から解放され、自由奔放、疾風怒濤の時代を一人ひとり生き抜き、文字通り、青春を謳歌したかけがえのない日々であった。

クラブ活動もきわめて活発で、その研究心と活動は、それを追求したその生徒たちの生涯にわたる原点として残るものが多かった。私は社会科学研究班（社研）に所属した。「日本はどうして無謀な戦争を防げなかったのか。平和を守るにはどうすればよいのか」などに強い関心をもったからである。また、六年間という在学期間とクラブ活動は、同期生のみならず、先輩や後輩にも多くの友人を得た。昭和二十五年三月、私は飯田高松高校を卒業し、早春のふるさとを後にして、暮れなずむ時又駅から東京に向かった。農家育ちで現金収入のない親を思い、辰野駅で鈍行を待ち、スイッチバックを繰り返しながら、早朝の新宿駅に降り立った。「伊那谷の三四郎」の十時間の旅であった。歳月茫茫。あれからすでに六十年の月日が流れ去った。

この四年間、在京飯田高校同窓会の会長を務めさせていただいた。関係皆様のご支援とご協力のおかげでどうやら任務を終えることができ、心からの感謝の念でいっぱいである。

また、個人的ではあるが、この『稲穂』で、ふるさと飯伊地域に四年制大学の設立、リニア中央新幹線のCルートの実現と飯田駅の設置、飯田の国際文化環境都市への発展などを提言した。これからも微力を尽くしたいと思う。

ふるさと飯伊地域が子々孫々まで、平和で豊かな国際的な文化環境地域として発展することを願うこと切なるものがある。

●参考文献

校友会誌1 飯田東高等学校校友会（昭和二十四年三月二十日）
長野県飯田中学校・飯田高等学校校史 長野県飯田高等学校同窓会（昭和五十五年十月三十日）